令和元年度第二回 教育課程編成委員会 議事録

【日　時】令和元年１２月３日（火）１０：００～１１：００
【場　所】こころ医療福祉専門学校壱岐校
【委　員】壱岐市社会福祉協議会副会長　品川　洋毅
壱岐市立老人ホーム所長　吉田　博之
社会福祉法人博愛会特別養護老人ホームハッピーヒルズ（幸せの丘）
施設長　山口　壽美

【事務局】校長　中野 勝、介護福祉科学科長　田島 百合子、記録　藤 玲子

議　　題　１　次年度の教育課程
２　合同就職面談会
３　介護福祉士国家試験に向けた取り組み
４　卒業年次生の進路
５　現場が求める人材像
６　今後のスケジュール

内容
（１）次年度の教育課程
田島：配布資料にもとづいて次年度の教育課程編成方針について説明。
中野：基本的にはこれまでの教育内容を踏襲しつつ、教育課程編成委員会でいただいた意見をどのように教育内容に反映するか学科内で検討し、具体的な方針を決定する。
品川委員：教育課程の計画がしっかりしているのを確認し、安心した。現場で活躍できる人材の育成に期待している。

（２）合同就職面談会
中野：１０月１１日（金）島内各施設にご参加いただき、大変充実した面談会となった。本年度は日本人７名、留学生１名が壱岐市内での就職を希望している。昨年度はこの時期にはほとんどの学生の就職先が決定していたが、本年度は国家試験を終えてから就職活動を開始しようと考

えている学生が多い。介護福祉士という資格を得た上で責任をもって業務に臨みたいという考えの表れだと捉え、学生たちの決断を応援している。

（３）国家試験

田島：学校で取り組める国家試験対策を積極的に行い、国家試験合格に向けて努力している。

中野：ある社会人学生が始業前・終業後の時間外学習を始めたところ、他の学生もその姿に影響を受け、時間外学習を始めた。

上から押し付けるのではなく、自ら学習する雰囲気が出来上がったことは学生たちにとって大きな意味がある。今後も自ら学ぶ意欲を高める学校運営に力を注ぎたい。授業時間外の自己学習に関しても教員が指導・質問対応等を行っており、学生たちには疑問点をそのままにせず多様なアプローチで問題に向き合う力を身に付けてほしいと願っている。

国家試験は２年生全員が受験する。もちろん全員合格を目指したいが、留学生には厳しい部分がある。しかし、最後まで諦めずに学生・職員一丸となって努力を続け、良い結果につなげたい。

冬休み中、国家試験対策補講の実施を計画している。２３日から２７日までの５日間、模擬試験・過去問題を中心に試験・解説を実施する予定。

また、地域貢献の一環として１２月１日に社会人対象の国家試験模擬試験を計画し、各施設にお知らせしたところ、６名にご参加いただいた。

吉田委員：対策模試助かったが壱岐市社会福祉協議会主催の実務者研修の最終日だった。国家試験前の貴重な力試しの機会なので参加を希望した職員もいたのだが、日程がかぶってしまったため、実務者研修を優先させ参加を見送ることとなった。可能であれば次年度以降は日程の調整をお願いしたい。

中野：外部の研修との兼ね合いには思いが至らなかった。次回からは確認の上日程を検討したい。

（４）進路

山口委員：昨年度はこの時期には大部分の学生が進路を決定していたとのことだが、今年度の学生はどういうところで迷っているのか。

吉田委員：市内なら確実にどこかに就職できるという意識があるのでは

ないか。よほどのことがない限り４月以降にずれ込んでも就職できるという気持ちでゆったり構えている部分もあるのだろうか。
田島：どこに応募するべきか非常に悩んでいる。具体的に考えているというよりも選択肢を絞りきれていない。納得しないまま応募するよりも目前に迫っている国家試験に集中させ、そのあとで腰を据えて考える方が良いだろうと判断し、そのように指導した。
中野：給与や待遇・福利厚生等といった明確な判断基準をもって悩んでいるようではないのだが、態度が煮え切らない。
品川委員：処遇面はどの法人もほとんど変わらない。それを基準に悩んでいるわけではないだろう。やりがいやその施設の特色を明示する等、施設側のアプローチにも工夫が必要だと感じた。
中野：連携施設奨学金を受給している留学生は入学時点から進路が決定しており、安心な反面かわいそうな部分もある。日本人学生には自由に進路を選択でき、母国で働けることのありがたみを感じ、勉学に打ち込んでほしいという思いがある。
山口委員：奨学金の関係で学生本人の学費個人負担はないものと思っていたが、そうではないのか。
中野：全学生が市からの助成金を受け、学費の一部にあてている。更に日本人学生は県介護福祉士修学資金を活用し、結果的には個人負担がなくなるが、留学生はその限りではない。長崎県内で５年以上介護業務に従事する必要があるため、将来的に県外での就職を希望している留学生は修学資金の利用には消極的。介護施設から奨学金の貸付を受け、働きながら返済するか、自己資金やアルバイト給与で学費を支弁する必要がある。
また、長崎の法人本部から、市内の施設に奨学金の支給をお願いできないかとの打診があったが、高校在学中に、施設の状況を理解しないまま就職を決定させるのは学生にとってプラスになるとは断言できないためこれ以上話を進めていない。その後留学生対象の奨学金ならばどうかとの打診があったが、市内施設にその可能性はあるかお尋ねしたい。
山口委員：福岡のある介護科の高校は施設と提携して奨学金を出してもらう制度を創設したとの案内があった。同様の取り組みを行っている学校はあるだろう。

（５）現場が求める人材像

吉田委員：現場では働きながら資格取得する人と並行して働くことになる。当然学校で習ってきているだろう、できて当然という目で見られることになる。

全国的な流れかもしれないが若い人はコミュニケーションに対する感覚が鈍い。友達口調で話すことが上手なコミュニケーションだと勘違いしている部分があるのか、職員の中には立場による適切な言葉遣いが出来なかったり、報告中に壁にもたれかかる等といったTPOをわきまえない言動が目立つ者もいる。

在学中から上下の関わりをもって、リーダーシップやコミュニケーション能力を身に付ける機会があればと感じている。社会に出ると初対面に人とも連携して働くことになる。下の学年の面倒を見る、上の学年の指示を受けて動くという経験は社会に出てからも有益だと思う。

品川委員：職員同士でそのような状況は目にする。

田島：学校では言葉遣いやマナーについても教育を行っているが、周囲の環境に流され、易きに流れる傾向を実感することがある。更にこまやかに指導を行いたい。

山口委員：技術を持たない高校生が入職すると教育に時間がかかる。

養成校卒業者は当然即戦力になると期待される。

品川委員：実務者研修を受けた職員と受けていない職員では資質が大きく異なる。受けていない職員は育成に時間がかかる。学校で教育を受けた学生が入職してくれるのは大きなプラスになる。

中野：即戦力となるべく、介護技術の習得に力を入れていきたい。

吉田委員：叱られ慣れていない者はちょっと叱られると必要以上に落ち込むことがある。叱られる機会も必要。叱られた内容をマイナスに捉えるのではなく、自分の成長につなげられるような感覚を身に付けてほしい。

（６）今後のスケジュール

１月２６日（日）介護福祉士国家試験

２月２０日（木）～３月２０日（金）第二段階施設実習

３月３日（火）卒業式

令和２年度入学予定者数について報告。
日本人６名。留学生８名が確定。２月に留学生の第２期入学試験を予定している。人数は確定していないが、最終的な入学者数は２５名ほどになる見込みである。